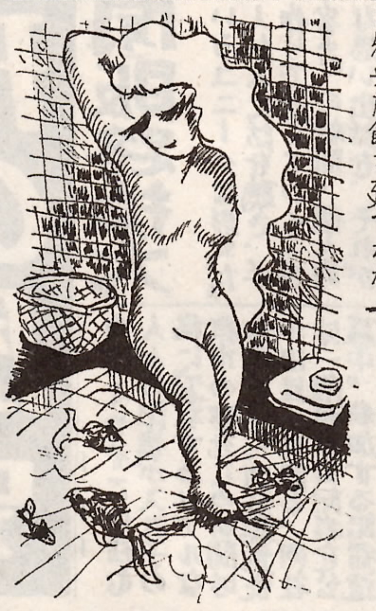
ひとりごと 一人言半生記（一）

山口県出身の竹中さん(70)にお話を伺った。~あてもなく彷徨う町の筵の上で星を眺める日々の中、名も知らぬ老夫婦の世話でうどんや菓子パンをご馳走になった。鉛筆削りが得意だから板前になった。自分は京橋で職についた。山口県から京橋まで通勤したのか？少し遠い気もするが。まあ、いい。いや、その時は西成か。兄は大阪にいた。母もいたような気がする。姉もいたのか？父はどこにいる？広島にいたのか？自分は酒は飲まないがタバコは吸う。で、入院したこともある。どこの病院だ？余談だがカラオケが苦手だ。幼少の頃は故郷で畑仕事を手伝っていた。西成に来て施設も転々とした。天六の施設な気もするが？どこにいたのか？で、ズボンの裾上げやボタンの縫い付けも自分でする。で、老夫婦にお世話になるような気がして高度経済成長真っ只中の昭和39年頃に西成に来た。筵の上で星を眺めていると、京橋で板前だった気もするし、畑仕事を手伝っていた気もする。広島か？山口か？どこにいた？もう何が何だか。~散らばった記憶の欠片を拾い集めながら語る竹中さんは、子供の頃から虚言癖があるんやと自嘲的に笑った。

金魚風呂で癒し

●東郷青児タイル画と。

「金魚風呂」なるものがあると聞いて訪ねた。山王一丁目の旅館明楽は戦前の木造二階建てながら、気楽できれいな日本間と豪華な家具の明るい洋室が自慢だ。浴槽を金魚が泳いでいるのかと思えば、大小二つある風呂場のそれぞれに水槽を設け、十数匹の金魚を眺めながら湯につかるという趣向。二坪ほどの大浴場は東郷青児の絵を模したタイル画もあるモダンな造り。面白いのは隣の小さい方。洗い場の床が一部ガラス張りでその下に水槽がある。流れるお湯越しに真上から金魚を見る格好だ。当初は多くの同業者も見学に来た名物は、当主・西村実さん（46）の義母ハナさん（77）の考案。旅館明楽を創業し、奈良の猿沢池の畔に観光旅館を建てるなどなかなかの才人で、豊中から来て間もない西村さんを何かと引き立ててくれたという。「エサやりや掃除など大変だが、これを楽しみに来る客も多い」と西村さん。金魚とともにのんびりすれば一日の疲れも癒されるだろう。



社説

いつの時代も今がダメ？

時代の共有

昔は良かった話と、今時の若者はダメという話はセットになって何時の時代にも現れるようだ。ギリシャ時代のプラトンは「国家」という本の中で民主制に傾倒する若者達を自堕落で勝手で年長者の意見を聞かないと今の世を非難しているし、エジプトのロゼッタ石に描かれた絵文字にも「今時はダメ」とあったという話まである。

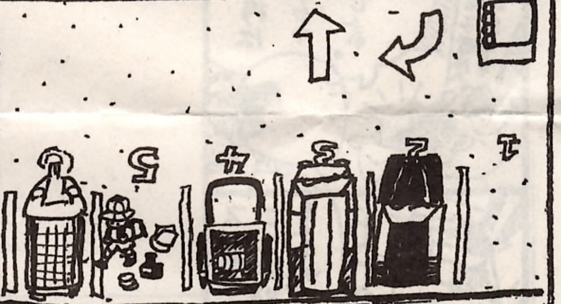
本当に世の中はどんどんダメになっているのだろうか。雇い止め、貧困ビジネスとせちがらいダメな「今」からたった二百年前には毎年飢饉におびえ、幼いときから親を離れ働くのが当たり前の時代もあったが、いつの時代も若者は希望だ。世の中は浮き沈みを繰り返し、幸福な時代は長続きしない。その度に人は「昔は良かった」を繰り返すけれど、幸福な思い出話はいつの時代にも人を少しだけ幸せにする。大変だったけれども若かった良い時代の話を世代間で共有できれば、今という時代も若者も案外捨てたものでは無くなるのかもしれない。

●求人廣告●
新聞記者　西成なるへそ
男女問はず・経験不問　常時
山王一の五の三一　新福寿荘内
ブレーカープロジェクト
（電話）〇七〇・五〇四六・八六六七

ガチャポンから骨壺まで

～副業も大成功～

万博で賑わう大阪では、職人さん達を陰ながら支えている手荷物預かり所が今日も大盛況だ。朝六時から職人さん達は、手荷物とはいえほぼ全財産を預け、安心してそれぞれの仕事場に出て行く。しかし中にはバクチにはまり大工道具や骨壺まで預けたままにする客もいて頭を悩ますところだが、新しく始めた副業の方が好調で気にする暇もない。その副業というのが、子どもに大人気のガチャポンで、大阪一円で約百ものお店の軒先に四百台程を設置している。ウルトラマンや「おかあさんといっしょ」のキャラクターが人気で日々商品補充や入れ替えで大忙しだ。労働者から子どもにまで喜んでもらって嬉しい悲鳴をあげている。



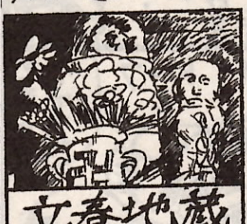
一年生車中泊

西成～札幌

「はやく西成に帰りたい」。東京の大学を卒業し、晴れて社会人になった白木聡さん。将来は実家の質屋を継ぐため、大阪勤務だからと某OA機器メーカーに就職したが、なぜか札幌勤務を言い渡された。この冬は朝から家と事務所の雪かきに追われながら、車で札幌近郊の代理店を飛び回る毎日だ。このあいだ、ついに大雪で道路が通行止めになり帰れなくなってしまった。地元の人たちのアドバイスを守り、ウィスキー、ビスケット、毛布とジャンパーを車に積んでいたおかげで、一晩の車中泊をなんとかしのげた。白木さんは子供の頃、阪堺平野線に乗って三十分かけて阿倍野区の常盤小学校に通っていた。全校生徒五千人のマンモス校で、集団下校の日は校区組と越境組に分けて集められ下校したという。社会人一年生の大阪から札幌への「越境」は、白木さんに新たな試練をあたえている。

西成 お地蔵様巡り

連載・柳本京子（十）

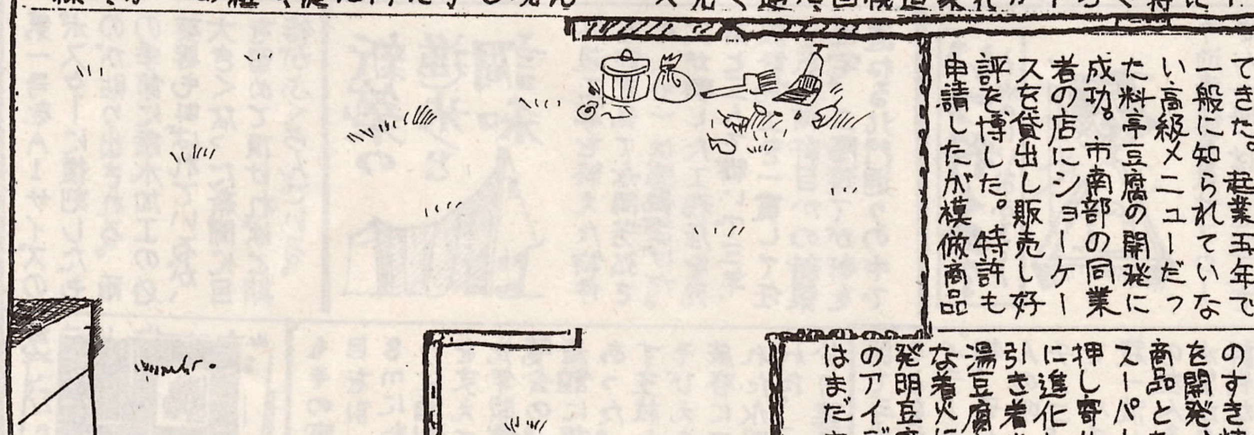


立春地蔵

戦前からおられ、戦時中も戦火にあっていない。ずっと火から住民を守ってくださっていると言い伝えられている。盆踊りもし、はじき豆、岩おこし、ふかしいもをお供えし、徹夜で近隣の人達が思い出話をしたりして親交を深めてきた。「志村のヒゲダンス」をまねて、大人も子供も口ヒゲをつけて踊った。

やわらか頭で発明豆腐

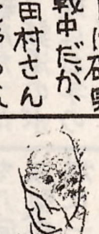
田村豆腐製造所のご主人田村さんは若くして独立した際の借入金の金利年60%に打ち勝つため様々なアイデアを繰り出してきた。起業五年で一般に知られていない高級メニューだった料亭豆腐の開発に成功。市南部の同業者の店にショーケースを貸出し販売し好評を博した。特許も申請したが模倣商品も続出。新商品として玉羊かんをヒントにゴムに玉子豆腐を詰め、列車のお供と考え出すが、日持ちと楊枝で指すと汁が飛び散る問題を解決できず断念。次は具材入りのアルミ鍋をコンロにかけるだけのすき焼き鍋セットを開発、好評で主力商品となり大阪中のスーパーから見学が押し寄せている。更に進化した、ひもを引き着火して温める湯豆腐セットは確実な着火に苦戦中だが、発明豆腐屋田村さんのアイデアとやる気はまだまだ尽きない。



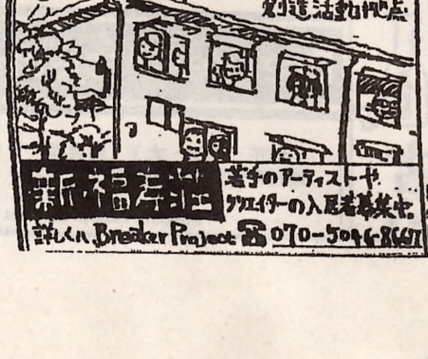
連載小説 みさ子、愛の行方（三）

黒田信子

みさ子は引返して言うと、三人が顔合せてみさ子に向って缶をけりつけて、そのまま走って表通りに出ていった。道一杯に広がった缶を見て老人はさびしそうな顔をしている。みさ子は見ておれずに缶を拾い集めはじめた。道を行く人々が、そんなみさ子を見て笑っていく。拾うのに夢中なみさ子はそんなことも知ずに胸にだき上げたら老人の所に持っていくと老人は頭を下げていた。もうあと、わずかになって、胸に抱きしめていた缶を老人の許に持って行くと、みさ子の拾うのを両手を合せて見ていた。最後の一缶を拾って老人の許に置いて、「わぁっ」と一息ついて、胸に手を置くと、なんと胸の上衣が泥でベタベタに濡れていた。「ああ、仕様ないな」とつぶやいて「おじさん、帰るわよ。おじさんも気をつけてね。もうこんな事がないようにね」帰りかけると、老人は淋しそうな顔でうなづいた。



家に帰り服を着替えると、なんとなくわびしい気持になり、思わず電話を持った。「もしもし、三谷ですが。主人はいますか」夫のつとめ先の会社に電話すると、まもなく夫のきびしい声がきこえて「なんだ。今頃一番忙しい時に電話するな」（つづく）



創造活動拠点
新福寿荘
若手のアーティストやクリエイターの入居者募集中。
詳しくはBreaker Project ☎070-5046-8667

珈琲館
白木屋
萩之茶屋2丁目3番8号

来れ！編集会議
西成なるへそ新聞
【とき】11月10日(日)
11月30日(土)
12月1日(日)
12月21日(土)
12月22日(日)
【ところ】kioku手芸館たんす 山王1-11-5
あなたも記者に！

アートスペース
ジューソー
#13
山王1-5-31
新福寿荘内

田村豆腐製造所
玉子豆腐付き
スキヤキ
山王2-13-28